

浄土

1984-5

昭和十年五月二十日 (第三種郵便物認可) 毎月二回二日発行
昭和二十四年四月二十八日 運轉 (特別郵便物認可) 第三二五号
昭和五十九年四月二十五日印刷 昭和五十九年五月一日発行
第五十卷 五月号



一月一句

寂庵の青葉に木洩る無量光

都会文明の喧噪。環境社会の軋轢あつれき。時に私たちは、こうした日常のなりわいの時所を離れ棄て、遠く別れて、ひとり逃れ隠れたいと思う。

しばらくの余暇を得て、今、森とした木立の中に佇たたずむ。寂とした草庵の縁に坐すわる。五月晴れの陽光が心地よい。薫風は緑の色を含み、さわやかな香りを運ぶ。芝の青さは、若葉青葉の新緑の勢いを映している。池の水も、鮮やかな波紋を作り、戯れる水鳥の群れがいと美しい。池畔を歩いて、一瞬、白鳥の羽ばたきの優雅さに、目を奪われ茫然自失する。ふと我れに返って、鯉魚の泳ぎぶりの雄渾なさまに感じ入り、花々を巡る紋白蝶の舞い踊るような軽快さをよしとする。なにもかもが新しく、そして潔いさよく、こんな時間、こんな世界を過すごし持てたことがありがたい。

そこで、おもむろに並べてみた十七字ではあるが……。——青葉を通しての木洩れ日がいかにも清らかで、また暖かそうであった。新緑にやさしく触れてこぼれてきた五月晴れの陽光を、阿弥陀如来の無量の光と感じたのである。まさしく、私はこの無量の慈光を受けさせていただいて、私自身の明日からの生活に活かして行きたい。私のいのちが、如来の無量のいのちにあずけられて、無事安穩のうちに一生懸命の人生となりますように。

あらたふと青葉若葉の日の光 松尾芭蕉

この墓に青葉もる日のやはらかに

池内友次郎

ところで右の二句、芭蕉、友次郎もまた、日の光の限りない慈いつくしみを新緑の青葉に移し置いて、みずからの心のさまをよく写し出している。まづは、拙句の未熟さが恥はずかしい。(勝崎裕彦)

五月号



或は仏光あり。百仏世界或は千仏
世界を照らす。

——『無量寿経』光明歎徳章

目次

法話

- 母情仏心……………菊地謙雄……(2)
凡夫の悲しさ……………豊島徳宝……(6)
〈ずいそう〉わが街旭川の春……………佐伯英学……(11)

特別寄稿

- 祇園と花代……………高木進正……(16)

《世相評談》

- 「緑」へのめざめ……………宝田正道……(32)

エッセイ

- 庭に来る小鳥よ……………木下隆一……(22)

寄稿

- 念仏の発展と称名する心……………上野浩……(28)

論語「仁」論(下)

- 「仁」は共同社会の理念——……………河野喜雄……(40)

- 浄土句集……………一田牛畝選……(38)

〈表紙裏〉一月一句「寂庵の青葉に木洩る無量光」

表紙 小林治郎画

カット 大正大学美術部

(法)

(話)

母情仏心



母の合掌

それは歳の瀬も迫る十二月始めのこと「母

菊きく地ち謙けん雄ゆう

(横須賀市西光院住職)

の病、いよいよ重し」との父の書信を受けて急遽、豊橋へ向った。その頃のこと、三浦半島から急行列車で七時間余を要して夕刻、母の病床に駆けつけた。薄暗い電灯の下で母は実姉、私の伯母から夕食の介護を受けていた。

— 光を拝す —

一カ月前とは競べもつかない痩せ細った生気の無い幼児のそれであった。伯母の励ましで努めている様子ではあるが全く食慾は無い。二口三口で口を閉じてしまった。私は台所へ走ってクズ湯を作って進めてみたが同じように数度口にするだけだった。ふと、母の臉に光るものを見た。

翌朝私は押入から夜具を取り出して太陽に乾し、午後充分に陽の光りと、熱を吸収した温い、ふっくらした夜具をのべると伯母と二人で母の背に両手を入れ抱えあげてその床に移した。母の体は幼児のように小さく軽かった。「ありがとう、いい気持」と、合掌して私を眺める眼に涙が浮んでいたのを私は今も忘れない。

子供の頃、体が弱く、度々学校で気分を悪くして母に背負われ、家に帰ったことがあるが、その大きい暖い母の背と、今の母の背と同じとは何んとしても思われなかった。

それから十日程たった十二月半ばのこと、母は突然、「来迎仏をおまつりして」と申出た。家族一同、医師から母の病は恢復の見込の無いことを知らされていたが、今の言葉で少からず狼狽した。母は己れの生命を知っていたのか。

母の頭の真うしろに軸を掲げた。そこでは拝めない、こちらへ——と。自分の顔の左横の壁に祀らせると、「さあみんな一緒にね」と、日常勤行を共々読誦した。それからの母は本当に安心しきった姿で、文字通り念仏相続の病床であった。枕下に侍る者が助音低声念仏を続けたのは勿論である。

母の要請で悟真寺の山田承元僧正から十念の授与を頂いた翌早朝、伯母の声で一同病床に集った。呼吸が乱れて欠滞している。

医師から臨終の近いことを知らされ、来迎
仏に猷灯香し低声念仏を続けた。母の口元も
かすかに動いて称名の姿であった。

東京の花柳寿太郎の内弟子として修行を続
けている二女の文子が帰って来た。昨夜母が
夢枕に立ったので驚いて帰って来たという。
電報を見てからでは到着できない筈の二女が
母の招きで臨終に間に合ったのだ。

こうしてすべての肉親縁者に看まもられて
その夜十一時五十分、母は安らかに去って行
った。世寿四十四歳。

その時、来迎仏の白毫相から一筋、画かれ
た御光が一段と輝やきを増して射しているよ
うに私には拝まれた。母は正しく引接のみ手
に抱かれたのである。

—— 仏のお子だでね ——

母は農家から寺に嫁いで来た。寺に嫁いだ

果報を常に口にして経本を手にし、み仏への
御給示に心を注いでいた。朝の勤行は父で、
夕食後は必ず母が勤めて、私は四、五歳頃か
ら毎晩、母に連れられて本堂にお詣りした。
「あんたは仏のお子だでねえ……」、まさし
くこれが、いつも私に語りかける母の言葉で
あった。

こうして私は母から四誓偈を習い、小学校
入学後、父から阿弥陀経を二行づつ教えられ
たのである。

生れながら身心共に弱小の私を父は殊の他、
厳格に育てたようで臆病者の私に時折、夕方
本堂が薄暗くなると仏前の供物を下げて来る
ように命令した。本堂と言っても庫裡と別棟
ではなく唐紙で仕切られた座敷を隔てたその
次の間であるが、薄暗い本堂は数々の仏像や
璽珞などの莊嚴が漆黒の影をおとして、何ん
とも言えない不気味さで恐怖心を誘うのであ
った。ちゅうちゅうする私を母は、「あんたは
仏のお子だでねえ」と唐紙を開いて電気的光

を入れてくれた。

決して同行しなかったが如何程、嬉しく、力強く感じたことか。

母の野辺の送りが終わった時、叔母の現瑞尼が私に、「あんたのお母さんは、あんたの病室から出て行く後姿に合掌していたのを、度々私は見た」と。真に勿体ない、こんな立派な母心に私は育てられたのである。

—— 仏の心 ——

小学校二年を終えた三月二十七日、私は藤枝の西光寺へ徒弟として修行に出された。仏道修行が如何なるものか、他人の家がどんなものか何もしらない少年は、父に連れられて嬉々として故郷を後にしたのである。ましてや心を鬼にして、最愛の吾子の将来を思っ手放した両親の胸中を知るよしもない私であった。

月日を経るにつれて深まりゆく望郷の心と、修行生活の厳しさに幾度び泣いたことであったろうか。ともあれ中学三年、師匠が亡くなるまでその生活が続いたのである。おかげさまでのことで、私の小心にささやかながら忍耐力がついた。弱い体も鍛えられ、病に臥せることも少なくなった。人並の心と身に生長することができた。

今日の家庭教育の常識では理解し難い父母の躰ではあるが、こうして私は育てられた。父の尊い鞭が無ければ寺院生活の厳しさが身につかなかったであらうし、あんたは仏のお子と後姿に合掌してくれた母情がなければ、拝み合う心の尊さを汲みとることはできなかったろう。世の中に、親はたくさんいるが、私のためには私の親に勝る親はいない。これが両親を送って半世紀を経た今日の、私の実感である。

(法)

(話)

凡夫の悲しさ



我々凡夫の悲しさは、どんなに一心専念に口称念仏しても、「目に見えず、耳に聞えず、手にふれず、心にふるる弥陀の御光」の御歌の様に、煩惱が眼を遮ぎって、御仏の御姿を拝せぬことにあります。現代人は目に見えな

豊島徳宝

(八王子市相即寺住職)

い存在は否定する傾向にあります。我々が呼吸している空気は目に見えませんが、今我々生物を生かさせております。風も、電波も、音波も目に見えなくとも存在し、我々を一刻生かさず、我々もその恩恵で生きています。

我々は今は見えない存在となった御先祖の御恩、社会の多くの人々の御恩、又、空気や、水やその他総べての大宇宙の御恩によって生かされて頂いています。

此の様に数限りない御恩を総称して、無量の御恩、無量寿、無量光と申します。浄土教では南無阿弥陀仏という仏様として拝みます。阿弥陀仏は四十八願成就によって、西方に極楽世界を莊嚴なされ、その中の第十八願の凡夫往生の願成就によって、我々は、誰でも、どこでも、いつでも、口称念仏すれば、阿弥陀仏の願力に乗じて、凡夫のままで往生させて頂けます。有難い願力のままに口称念仏すれば、罪の有る此の身此のままで往生させて頂けると分っても、阿弥陀仏の御姿、西方浄土の莊嚴を見奉ることが出来ない為に、西方浄土の存在を疑う人が多いのは、古今を通じて凡夫の悲しい姿です。

私はある人から、「死んだ人が生き返って来て確かに極楽浄土は有ると証明すれば、信

用するし、念仏を信仰する」という言葉を聞きました。現代人は疑い深いものだと思つて感じました。私は勅修御伝を読んで、法然上人が三昧発得の為に、三昧発得の心の師、唐の高祖善導大師に師事し、立教開宗し、遂に口称念仏三昧中に自然に、極楽世界の莊嚴を見奉り、次には、弥陀三尊に御会い出来、次に宝鳥、琴笛等の極楽の「声」を聞くことが出来て、生身のままで往相回向、往生浄土を実現なされ、その体験を元にして、弟子や信徒等に精神的に還相回向、極楽から還つて来た実感そのままを布教の御力とせられたので、上人御在世中は極楽の存在を疑う者は一人も無かったと拝察されるのであります。我々はどうなにか口称念仏に励んでも阿弥陀仏の御姿を拝見することが出来ないかと分っても、それは我身が罪業深重の身の故であると信じて、阿弥陀仏は目には見えなくとも、口称念仏すれば凡夫の眼前にお立ちになり、凡夫の心の中にお入り下さって護念下さると固く信

じて、疑わずに御念仏をすればそれでよいのです。

次に勅修御伝から、極楽の存在と阿弥陀仏の存在の信仰的体験を通じて、我々の信仰のより所としたいと思います。勅修御伝巻三十七に、建暦二年正月十一日の辰の時に、上人が弟子等に、「高声に念仏しなさい。阿弥陀仏がお出で下さいました。観音勢至菩薩その他の聖衆も現前しておられます。拝むことが出来ますか。」弟子等は、「拝むことが出来ません」とお答えしますと、「愈々念仏すべし」と御勧めになりました。又、同日の巳の時に、弟子等が三尺の弥陀の像を御迎えになり、病床の右に立てられて、「此の仏を拝みますか」とお尋ね申しますと、上人は指で空を指して「この仏の外に又仏がいらいしやいます。拝むことが出来ますか」と仰せられました。次いで弟子等に、「凡そこの十余年よりこの方、念仏の功積りて、極楽の莊嚴及び仏菩薩の真身を拝み奉ること、常の事なり。然

れども、年来は秘して言わず、今最後に臨めり。かるが故に示す所なり」と。以上原文のままに書きましたが、仏を見奉ることが出来る人と、見奉ることが出来ない弟子等の姿がよく分ります。

上人御入滅の建暦二年正月二十四日の酉の刻から二十五日の巳の時に至るまでは、高声念仏を無間に続けられたので、弟子等五、六人が代わる代わる助音しましたが、退屈してつて念仏が続かなくなりましたが、上人は高声念仏を続けられました。私は五十歳代までは法然上人は念仏の信が固いので、高声念仏が続けられたのだと考えていましたが、法然上人の三昧発得後の御姿を拝読してから、病床に弥陀三尊の御来迎を御迎えして弥陀三尊と御対面なさりながらの高声念仏と、口称念仏はしていますが、御仏の御姿を拝することの出来ない弟子等の心の問題だと思いました。弥陀三尊と御対面なさりながらの口称念仏と、全然拜することが出来ない弟子等が退屈して

うのは無理からぬことです。

法然上人は、選択本願念仏集における「第七、弥陀の光明は余行の者を照さず、唯だ、念仏の行者を撰取したまうの文」の中で、三縁を御示しになり、その中の近縁のところ、
「衆生仏を見んと願すれば、仏即ち念に應じて目前に現在す。故に近縁と名く」とあります。「応声即現」の弥陀と申します。肉眼には見えなくとも、念仏信者の目の前にお立ちになられているのです。私達は近縁を信じ、
応声即現の弥陀を信じて口称念仏を続けければよいのです。法然上人は生身のままで、念仏三昧中に極楽の御莊嚴、陀陀三尊とお会いなされた唯一人の極楽世界を見てきた生き証人です。我々念仏信者は法然上人の言動をそのまま信じて只一向に念仏すればそれでよいのです。何も思い悩らうことはありません。

私は法然上人が善導大師を高祖と敬い、偏依善導として凡入報土宗、浄土宗を御開きに

なられたのは三昧発得の師であったからであり、法然上人御自らも御年六十六歳の時に口称念仏三昧中に三昧発得なされました。高祖善導大師の発願文の様に、「彼の国に至り終つて六神通を得て十方界に入つて、苦の衆生を救摂せん、の御言葉を実践せられて、六神通の一つの宿命通、即ち「此の世に生まれる前の前世を知り、死後の未来世を知る神通力」を得られていた為に、弟子の質問に判然と御答えになられたのであります。即ち、勅修御伝巻三十七に、建暦二年正月三日、ある弟子「この度の御往生は決定か」と尋ね申すに「我元極楽に在りし身なれば、定めて帰りに行くべし」と宣うとあります。文意から弟子の、「極楽往生は決まっていますか」の質問に對して、「私は元、極楽に住んでいた身であるから、間違なく極楽へ帰って行きます」と答えられておられます。私は去年まで法然上人の「決定の信」の「深心」の表れが、「間違なく極楽へ帰って行きます」とお答えにな

られたと思つておりましたが、此の御言葉は三昧発得の宗教的体験からの確信によつて発せられた御言葉と知り、有難さが骨身にしみる思いが致します。

今私達自身を省みる時、大昔から現在に至るまで、生死輪廻を繰返し、「過去を顧れば冥々としてその初めを見ず、未来を望めば、忙々としてその終りを尋ねること能わず。常に没し常に流転して出離の縁有ること無し」の我が身であります。

私は、今年法然上人の三昧発得の年、六十六歳を迎えて、一枚起請文の中の「念仏を信ぜん人は、たとい一代の法をよくよく学すとも、一文不知の愚鈍の身になして、尼入道の無知のともがらに同うして、智者のふるまいをせずして、ただ一向に念仏すべし」の文を只有難く拝読しています。法然上人の口称念仏は、信行具足、只一向に念仏すればよいのです。此の身このまま泥凡夫のままで口称念仏すれば、阿弥陀仏の莊嚴された真実報土に

阿弥陀仏の願力に乗じて往生させて頂けるわけです。此の愚痴の凡夫が、只口称念仏すればよいと思うと、何とも御本願の有難さが身にしみて夢の様な心持が致します。まことに有難いことです。

私は一枚起請文は、三昧発得の還來の聖者としての、阿弥陀仏の応現としての法然上人の御入滅後の念仏信者の心の灯としての御言葉であつたと受けとらせて頂いております。

「滅後の邪義をふせがために所存を記し畢」の文が、私には還來の聖者としての上人の温かい御心と拝察されるのであります。私は今年法然上人三昧発得の年六十六歳を迎えて、生涯無位無官の黒衣の修行僧としての法然上人の別の一面、晩年の三昧発得後の還來の聖者としての法然上人の御教化の御姿を説いて、残された自分の生涯を送ろうと存じています。

合掌

(す)
(い)
(そ)
(う)

わが街旭川の春



佐伯英学
さ へき えい がく

(旭川市浄道寺住職)

私の寺の法然上人御忌会は毎年四月七日に清修している。上人のご誕生の日に御忌というのもおかしな話かも知れないが組内寺院の日程の關係上仕方がない。

北海道のほぼ中央旭川市の郊外で農作地帯の真ん中にある寺は、檀信徒の三分の二ぐらゐが農家である。従つて御忌のつとまるこの時期の天候が檀家も寺も気にかかる。参詣人の多い少ないも天気によつて左右される。ちょうど野菜のビニールハウスや、水稻の苗床づくりの最盛中で、彼岸過ぎから雪を割ったり、土を撒いたりして雪を解かす。白雪の中から掘り返された淡黒い土の臭いが長い冬を乗り切つて来た農家の人々の氣持を奮いたたせるのか天氣が良いと寺参りどころではない。せつかく寺参りに来ても腰が落着かない。

幸いというべきか、今年の冬は真冬日(一日中気温がマイナスの日)が連続七十数日と寒さ

が続き、四月に入っても日中はともかく、夜は連日マイナスの日が続き、雪解けも遅れていた。それだけ農作業も遅れているので、心の中は別として、落着いて法要もつとまり、布教師さんの説教を聞いていたようである。

昨年は大冷害、寺詣りの人たちの話題ももっぱら今年の天候のことであり、秋の作況の心配である。

北海道の春は、車粉公害と共に訪れてくる。私の子供の頃は馬ふん風と共に訪れてきたものであった。冬の間馬そりを引いて歩いた馬のふんが、雪の消えた道路に残り、それが乾燥して春風に乗って舞い上がり人々を苦しめたものである。

ところが今は、自動車のスパイクタイヤで削り取られたアスファルトの車粉が春風に舞い上がり人々を苦しめ、大きな社会問題になっている。旭川では五月一日から自主規制ということになっている。このスパイクタイヤのために、冬の間削りとられたり、疵つけられた路面や標識ラインなどの補修費がまた馬鹿にならない。北海道開発局、道庁、市町村合計すると、昨年一年で二百七十億円も費やされとのことである。

スパイクタイヤ問題は路面凍結による交通事故との関連もあって関係機関も頭を痛めている。過去連続交通事故死日本一と不名誉な地位を確保している北海道。今年に入って、もう三百人が死亡している（四月三日現在で）。ほとんどが冬型の事故である。

私の寺のすぐ裏山は旭川市民スキー場である。スキー場の隣りが日本で最北端にある旭川動物園、そして一目三千本と旭川市随一の桜の名所旭川公園と続いている。

今年は雪が多く、融雪の遅く北向きのこのスキー場は、四月に入っても春休みの子供たちで賑わっていた。

冬が過ぎて一番遅く雪の降る日を「終雪日」という。気象台の統計によると、旭川での終雪日は四月半ばから五月上旬にその九十パーセントが集中しているという。遅雪の記録は六月八日となっており、花が咲き乱れ、カッコウが鳴き、田植えの最盛中になっても気狂い雪の降ることもある。

四月の初めまで賑わっていたスキー場が一休みすると、すぐゴールデンウィークを迎える。ゴールデンウィークを迎えると北海道は人々も、動物も、自然も、ありとあらゆるものが爆発的に、本当に生き生きと活気づき、活動をはじめ。

昨年の九月末で閉園されていた旭川動物園も四月二十九日の天皇誕生日からちょうど七カ月ぶりに再開された。待ちに待った開園に連日朝早くから子供たちの大喚声に賑わう。本当に長い間待ちに待っていた開園である。そして動物たちにとっても狭い灰色のコンクリート造りの畜舎からの解放でもある。暖かい春の陽ざしの下で思いっきり体を伸ばし、走り廻れる日の訪れである。

ゴールデンウィークはまたハイキング、スポーツ、観光シーズンの幕開けでもある。長い冬から解放され、身も心も軽々と人々は思い思いに春の活動を開始する。

水仙、タンポポ、チューリップ、ツツジ、サクラ、ありとあらゆる花が一せいに咲き競い、一年中で最も美しく、さわやかな季節が訪れてくる。

花の中でもとりわけ待たれるのは矢張りサクラである。行楽はもとより、農家の人たちにとっても農作業の目安とされてきた。農家の人たちはサクラを自然の温度計として巧みに生活の中に取り入れてきた。サクラの開花の早い年は農作業の着手も早く、開花の遅い年は着手が遅くなる。

昨年の春先は三十数年来のバカ陽気でゴールデンウィークには満開であった。今年はサクラ前線の北上が例年より十日以上の遅れているとのこと。旭川公園のサクラは五月の末にようやく満開になることだろう。

本州の三カ月を一カ月に縮めたかのように、一期に、文字通り百花繚乱の季節を迎えるのが北海道の春である。その花を背に水田ではトラクターや耕運機が轟音を響かせて黒い土を掘り起していく。

木々は緑を日一日と濃くしていく。陽当りの悪い谷間にはまだ残雪が白く光っている。室内にはストーブが冬のまま置かれ、朝晩には火が入る。六月一ばいはどうしても必要である。

サクラの花が散りはじめる頃になるとリラ（ライラック）の花が咲きはじめる。その優しい、淡い香りが道行く人々を和ませる。この頃になると日中の気温もようやく二十度前後の日が続きます。

ところがそんな季節に思わぬ冷気が訪れて、ようやく軽装になった人々を震え上がらせる。私たちはこれを「リラ冷え」と呼んでいる。

こんな天気が続いている五月晴れのある朝「カッコウ」「カッコウ」とさわやかな鳴き声が耳に入りだす。農家の人たちは、カッコウの声が聞えると畑に種を播いてもよいという。トウキビ（トウモロコシ）はじめ秋の味覚の種が播かれる。本州ではカッコウは高原の鳥ということになっているらしいが、私の住んでいる旭川では街の中でもその鳴き声を聞くことができる。

山では山菜が日ごとに大きくなっている。フキ、ワラビ、カタクリなど山菜採りの家族連れの姿が見られだす。

昨年この時期に、どこからどう迷って現われたのか、熊が一頭私の寺の裏山からスキー場にかけて出沒した。その熊公ある日の夕暮れのこと、道路（レッキとして道入県道である）に出てしまい、自動車のライトに目が眩んだか、この乗用車と正面衝突してしまった。幸い人熊被害がなかったが、自動車は中破してしまった。おかげで寺の墓地と千鉢地藏さんには、「熊が現われました。参詣はご遠慮下さい」と高札が立てられ、ハンターが連日銃を持って山狩りしたが遂に仕止めることができなかった。

五月下旬から六月上旬になると、いよいよ田植えがはじまる。機械化されたとはいえ、矢張り田植えは春の風物詩である。

やがてスズランの便りが聞えだし、アカシアの花が咲きはじめると本格的な夏が訪れてくる。

祇園と花代

祇園会や真葛ヶ原も風薫る

蕪村

「祇園」という言葉を聞くと、何かバット華やいだ明るいものを感じます。それは舞妓さんのだらりの帯や、歌人吉井勇の「祇園双紙」に代表される

高木進正

（滋賀県甲西町永照院住職）

「かにかくに祇園は恋し……」といった、この花街のもつ特別な雰囲気や魅力にあるのかも知れません。

——昔、インドにスタッタという、貿易商を営む長者が住んでいました。彼は釈尊に深く帰依し、またたいへんな慈善家でもあったので、町の人々は彼



を尊敬して「孤独アソラシビシな人達に食物を施す人」と呼んでいました。長者はかねがね釈尊やお弟子達の修行をされる、精舎を建てるための、広い土地を探し求めていましたが、ある時、ブラセーナジツト王の王子ジェータ太子が、それにふさわしい果樹園をもっていることを知り、早速それを譲って欲しいと願ひ出しました。しかし太子は全く売る気がなく、長者をあきらめさせようとして、「この土地が欲しければ、お前のもっている金貨のすべてを敷きつめ、隙間がなければその値で売ってあげよう」と答えました。長者はそれを聞くと、すぐに多くの使用人を呼び集め、金貨を敷きつめるよう命じました。驚いたのは太子で、暫くその有様を見まもっていましたが、どうしてこんな大金を投じてまで、この土地を買おうとするのかと訊ねました。長者はなんの気どった様子もなく、ただ釈尊に寄進したいばかりであることを、淡々と説明しました。太子は長者の話聞き終るといたく心をうたれ、僅かな代金でその土地を長者に譲ったといいます。

この話はいろいろな経典に出ていて、若干の相異

はありますが、釈尊に奉獻した二人の人の名前に因んで、祇樹ジツ、給孤獨キョクドクの園、つまり「祇樹給孤獨園」と名づけられました。これら漢字に翻訳した人は、シルクロードのオアシスの町、クッチャ(亀茲国)の鳩摩羅什キョモロシという人です。実にうまく訳したものだと思いますが、「祇園」というのは、この祇樹給孤獨園の上と下の二字をとってつけたもので、つまり、省エネ、ラジカセ式に日本流に短縮したものです。

ところで昔、都や近江の国に、たいへん疫病がはやって困ったことがありました。この時神のお告げによって、遠くインドの祇園精舎の守護神牛頭天王ゴウダウテン(ヤマンタカ)を勧請し、懇に祀って祈願をこめたところ、たちどころに悪疫の流行が熄ったといわれています。そしてこれ以来、この牛頭天王を祀った、京都の八坂神社や近江の大鳥神社などを、「祇園さん」と呼ぶようになりました。京都の祇園祭がこの悪疫退散無病息災を祈る夏祭りであることは、先刻ご存知の通りです。

あでやかに君がつかえる扇より

祇園月夜となりにつけらしな 吉井 勇

遠いインドの祇園精舎が、京都の祇園新地になっているとは「お釈迦さまでも——」、まことに勿体ないことですが、古来、日本の有名な遊里は、門前町の盛り場から始ったものです。たとえば、伊勢の古市、摂津の神崎、山城の伏見、そして京都の祇園など、従ってまた「遊女」という名も、遊芸、遊興というよりは、むしろ宗教的な「遊行」ということに意味がありました。



ずいぶん昔の話、もう五十数年ももっと前のことです。私は京都の清水坂の寺の小僧をしていました。毎日のお逮夜まいりが私の務めの一つで、学校から帰ると、すぐに法衣に着かえて、檀家の日詣りをいたしました。ところがどういふものか、このA寺には、祇園新地にたくさんの檀家がありました。今ではもうなくなりましたが、廓の中に「切り通し」という所があって、その東側に曲りくねった路地が

迷路のように入りくし、そのいちばん奥に、Eというかなり大きい芸妓置家がありました。低い紅殻格子の表戸を開けると真っすぐに棕櫚竹を植えた蹠が続いて、さらにその奥に、家紋のついた渋い長暖簾を吊った入口がありました。暖簾をくぐって中に入ると、そこは二十畳ばかりの化粧部屋になっていて、さまざまな長鏡台がめじろ押に並び、咽ぶような脂粉の香の中で、まだ踊りの髪も花櫛もそのままだに、長い部屋着のうえから、派手な羽織をはおったお姐さんたちが談笑したりしていました。それがまたなんとも、なまめかしく艶やかなもので、私はただ子供心におどろおどろしていました。

いつものように、いちばん奥の仏間でお経をあげ、おつとめがすむと、ここの「館」の習慣でしよう、部屋のもん中に朱塗のお盆が一つぽんと置いてあって、その上にお茶とお茶菓子とお布施とがのせてあり、私はその前に座ると、不器用な手つきで、ぬるい白粉臭いお茶をいっぱい頂くのです。今でいうなら男冥利につきるというのでしょうか、もうその頃には、私のまわりにお姐さんや半玉さん、禿

などがいっぱいとり囲んでいて、私がお茶を飲み終るのをみとどけると、「ヤマさん花かえて！」と何十本もの真っ白い腕が、嬌声と共に私の眼の前に伸るのです。（その頃花街では、坊さんのことを「ヤマさんと呼んでいました）私はかねて用意してきた巾着の中から、五銭銅貨を出しては、それぞれの手に渡し両替をするのです。つまり「夕坊さんにお金を替えて貰うと験が良く、その日の花代がある」という習俗によるものです。一時は馬券を売るような騒ぎで、それがしずまると、私は女たちの視線を額に感じながらお盆の上のものを頂き、そそくさとお礼をのべると、あとは逃げるように表にとび出し、ホッと一息ついたものでした。今でならもう少しゆっくりさせて頂くのですが、当時の私にとっては、それはどうにも悲しく、羞しく耐えがたい女地獄でした。

ある日、その格子戸をとび出し、ホッと胸を撫でおろした時、頭に毛氈で作った、小さな桃割をのせた、可愛い雛妓がいました。まだ十二、三歳ぐらいだったでしょう、高下駄を何足も抱えこんで洗っていました。私を見上げると、「ヤマさんうちにも

花かえて」といいました。たぶん私の出て来るのを待っていたのでしょう。しかし私にはもう替えるお金は一銭もなく、「今日はもう一銭もないよって、次にはきつと替えてあげるから」と答えました。何か深い事情があったのでしょうか、彼女は悲しそうに眼にいっぱい涙をためていました。私はそれをふりきると、切り通しの赤い橋を渡りましたが、当時はまだ、舗装された道などは何処にもなく、雨あがりの下駄の泥をとるため、三味線の欠けた撥を握っていた、彼女の手のまだ癒えない霜傷の痕が、ひどく痛々しく印象的で、白川べりの桜吹雪の中を、「花」とはいったいなんなのだろうかと考えつづけていました。

死ぬという女の癖やほととぎす

潤一郎

これは谷崎氏が祇園一力楼の女将、お貞さんと深い中であつた時の歌だそうですが、彼の作品「乱菊物語」の中にこんな話があります。

昔、性空という僧が夢の告げによって、室津に遊

び、遊女花漆の今様を唄い舞う姿を眼め、フト眼を閉じると、臉の裏に白象に乗った普賢菩薩が現われ「法性無漏の大海に、普賢恒順の月、光ほがらかなり」という声が聞えてきました。彼は不審に思い、眼を少し開けてみると、やはり同じ花漆が今様を唄い舞っていました。性空は思わず合掌して彼女を伏しおがむと、花漆はたちまち白象に駕して、西の空に翔び去っていったのです。

昔の遊女はたいへん格式があつて、深い教養と幽雅な芸能を身につけ、貴族や武士などの社交界の花形でした。



私はこの春、所用があつてこの室津にまいりました。山陽電車の網干駅で下車。車を拾つて国道二五〇号線を揖保川を越えて岩見港へ。室津湾をとりかこむ半島に向つて、七曲の急坂を進む頃には、もう正午を大分過ぎていました。昼食をとるため車を降りましたが、竹久夢二が描いている「室の津懷古」の絵は、こういう場所から眺めたものだろうか、今

日の海も静かで、時折浜風が潮騒と磯の香をはこんで来ました。

夢二の絵の中には、室津の海を背景に、浜木綿のような白い顔の遊女がこちらを向いていて、その向う側に、黒いマントと山高帽子の異人さんが、両手で顔を覆つて深く考えこんでいます。ここにもまた、何か深い個々の具体的な人生の悩みがあつたのでしょう。こんなことを考え、フト道端の陽だまりを見ると、早咲きのいちばつの花が、白い可憐な葩弁を浜風にふるわせて咲いていました。

いちばつの花咲きいでてわが目には

今年ばかりの春ゆかんとす

子規

「今年ばかりの……」ここに無常があり、お念仏がありました。

そしてその日は、三月十八日、中野重治の「春さきの風の吹く日」、三・一五事件に連座した人々が獄死し、その家族や幼い子供たちが凍死した日。そしてまた奇しくも、わが法然上人がこの室の津に到

着された日。こんなことが私の頭の中でオーバー・ラップしていました。

「四十八巻伝」の伝えるところによれば、建永二年（二二〇七）二月十八日、上人は都大路を鳥羽口まで、南門より淀川を川船で下られ、そして一カ月後、この港に着かれました。途中のご苦労、ご難渋の日々、またこの港の風光をどんな思いでご覧になったことでしょう。港に入る上人の屋形船に、小舟に乗った遊女友君が、必死になって近づき、み教えを乞うた話はあまりにも有名です。

上人はこの時、彼女に後生平安のみ教えをとぎ、お袈裟と金泥のお名号を与えて、懇にいたわり励まされたといひます。彼女はもと木曾義仲の側室で、いつも義仲の冥福を祈り、そのお位牌を祀っていたと申しますが、この時以来、一切客から金品を受けとらず、客は困り果てて、花代としてそと紙包をお位牌の前に置いていったといひます。遊女のはじまりが室の津にあるといひますが、「花代」の始まりもまたここにありました。

法然上人はその夜、室津の港に一泊されましたが、

土地の盗賊どもがこれを知り、上人のお持物を奪おうとはかりました。その所を、「極楽から来た」の著者佐藤春夫はこんなふうに書いています。

「わが身の物としては、この手垢だらけの古珠数が一つ、木綿と麻との墨染が二枚、そしてこのぼろ袈裟があるばかりじゃ、大切なものは命一つ。それももうよぼよぼの明日も知れぬもの、お身たちの望みとならいつでも進ぜよう。そんなことで今は何も分け与える物もない。せつかく推参の礼に膝でも貸そう。眠って帰りやれ。お身たちにも安眠の場もあるまいが、わしの膝なら大丈夫、念仏を子守唄に安心して眠むれよ。わしが守って進ぜるから」

なんと温かく有難く、心にしみるお言葉ではないでしょうか。たとえ盗賊ならずとも、元祖さまのお膝を枕に、お念仏を頂き、真葛ヶ原の桜吹雪を眺めることができたなら、これが本当の「花代」でしょう。友君のお墓は、室津の浄蓮寺に立派な宝篋印塔として建てられています。

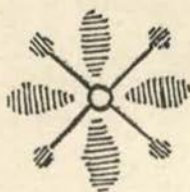
梅咲いて帯買う室の遊女かな

蕪村

エッセイ

庭に来る小鳥よ

——伊豆高原徒然草より——



小鳥来る音うれしさよ板庇

と詠んだのは蕪村であるが、晩秋から初冬

木きの
下した
隆りゅう
一いち

(随筆家)

にかけて、北方から山地から、いろいろの鳥が平地に帰って来る。板庇を踏む小鳥の足音に、蕪村は季節を感じているのである。古人

はこれらの小鳥を色鳥と風流に称⁺んでいるが、色彩鮮やかな鳥ということもさることながら、種類の多さということも掛けているのであろう。しかし、南へ去って行く鳥と、北から山から帰って来る鳥ではどちらの種類が多いのであろうかと手許にある資料を調べたら、これは圧倒的に夏鳥の方が多い。冬鳥に比べて色の地味な夏鳥は繁茂した木々の葉に遮られてその姿を確認するのが困難なことから、近年とみに盛んになったバードウォッチングの会でも、夏場は専ら啼き声の聞き分け方を指導しているようである。それに反して木々が葉を落した冬場は、小鳥の姿を見ることは容易である。

七年前に伊豆高原に書斎を建て、東京西郊の住まいの間を往たり来たり生活で、両方の庭に来る小鳥たちと親しんでいるが、なかなか名前は覚えられない。

その乏しい記憶の中で、両方共通して見られるのは、スズメ、ツバメ、シジュウカラ、

キジバト、カラス（ハシブト、ハシボソの識別不明）、トビ、ムクドリ、ヒヨドリ、メジロなどで、伊豆では、少なくとも私の知る限りではオナガは全く見られない。いつの間にかオナガは都市型の鳥になってしまったらしい。

伊豆で見られて東京で見られないものは、ウグイス、ホオジロ、サンコウチョウ、ヤマガラ、モズ、ツグミ、コジュケイ、キジ、ヤマドリ、コゲラなどのキツツキの類。ある年の春、東京でウグイスの声を聞いて喜んだが、裏の家で飼っているキュウカンチョウがその声の主であった。声だけで言えば、東京で聞かれて伊豆で聞かれないものに、カッコウとフクロウがある。東京のこの地に住みついて、いつか二十五年が経ってしまったが、年々住宅が建て込むにも拘らず、毎年初夏になるとカッコウの声を聞いている。かなり遠いところで啼いているようだが、カッコウの声は一体何キロくらい透るものなのであろうか。フクロウの声は伊豆で一度だけ聞いた

が、それもいまとなつては空耳だったような気がする。なぜなら、私の家の周囲は雑木林で、フクロウが巣づくり出来るだけの大木がないからである。

年末年始を伊豆で過して帰京以来、雑事に追われ、風邪に臥し、何度かの大雪に阻まれて伊豆行は延び延びになってしまった。雪の東京を逃れて、四十数日ぶりに帰って来た伊豆も三十センチほどの雪に埋っていた。

「やれやれ、なんで伊豆へ来てまで雪掻きをしなけりゃならんのだ」

二日前雪掻きをした時腰を痛めた私がぼやくと、女房は言った。

「豪雪地帯に住む人たちのことを考えれば、天国みたいなものよ」

確かにそれはそうである。

「あちらじゃあ、花も咲いていないのよ」

女房はそう言つて、雪の上に散つた山茶花の赤い花弁を抓みあげた。

「雪掻きやればいいんだろ！」

二月下旬だというのに、垣根の山茶花はやや盛りを過ぎたかなといった状態で咲き盛っている。例年なら一月の下旬には花は終つてゐるのに、この分だと彼岸過ぎまで咲いていそうである。仄かな夕日影の揺らぐ中で、十数羽のメジロの群れが無心に花の蜜を吸っている。

「可哀相に。山茶花の蜜を吸う以外に餌がないのね」

「梅も椿もまだ咲いていないし、寒桜もどうだか、山茶花が咲いているだけでも良しとしなけりゃ……」

「メジロつて、他にどんなもの食べているのかしら」

「林檎とか柑橘類を二つ割にして、その辺の木の枝に刺しておいてやれば嬉ぶだらうよ」

「早速作つてやりましょ」

「それより、この門どうやって開ける？」

門扉の裏側は吹き溜りになっていて、六十センチあまりの雪が固く凍りついている。メジロの餌よりも、門を開けることが先決問題であった。

「乗り越えるしかないわね」

「やれやれ、我が家へ泥棒みたいにはいるわけか」

「この雪ですもの。いろいろハプニングがあるわよ」

自分でやるわけではないから、女房は涼しい顔で言った。

悪戦苦闘の末、やっと炬燵でくつろげたのはそれから一時間近く経ってからであった。障子を開け放って、硝子戸越しに白皚々の景色を眺めながらワインを胃の腑に流し込む。

「随分日が永くなったわね」

いまの季節、日は暮れそうでなかなか暮れない。暮遅し、夕長し、暮れかぬるなど、いい季語があつて私は好きであるが、今年は一

向に春日遅々という感じがしない。春のかけらもない。暮れかねている上に、雪の仄明かりがあるので、戸外はかなり明るい。そんな中を一羽の小鳥が飛んで来て、目の前のペランダの柵にとまった。モズであった。モズだと女房に告げると、

「あら、きれいな鳥なのね」

と、獐猛なイメージが強い鳥だけに、意外や意外という思いだったようである。

「モズも餌とれないでしょうね、この雪では……」

「モズのはやにえって知ってるかい」

「ええ、有刺鉄線やなんかに蛙とか芋虫なんか刺してる……」

「あれを喰へばいいんだよ。でもモズって馬鹿だから、自分がどこに刺したか覚えていないんだな」

「ひとの物を頂戴すればいいんじゃない」

「それはそうだが……。モズの卵って見たことあるかい？」

「……」

「ウズラの卵の半分くらいかな？　不思議なことに、いくら煮ても焼いても白味が固まらないんだよ」

「温泉卵みたい」

「あれは白味がいくらか固まっているけど、モズの卵の白味は全然固まらないんだなあ」

「自然って判らないことがいっぱいね」

「鳥類は大抵雄の方がきれいだよ。でもシジュウカラは殆ど変らない。腹部に伸びている黒いネクタイ模様の短い方が雌なんだ」

「そんなこと言えば、スズメだってカラスだって、見分けがつかますか？」

「誰か鳥の雌雄を知らんや、か」

これは一本とられた感じだった。

「鳥が目を廻すの見たことあるか」

「……」

「或る日、俺が庭で落葉を掻いていた時、頭の上で五、六羽のシジュウカラが遊んでいた。と、その中の一羽が急に頭を下にしてスーッ

と落ちて来た。びっくりしたなあ、あの時は。何かの拍子で失神したんだな、きつと」

「で、どうなったの？」

「地面すれすれまで落ちて来て、ハッと気づいたのか、慌てて横へ飛んで事無きを得たけどね」

「スズメと言えば、私たちがここに住み始めた頃、全然いなかったじゃない」

「翌年の春だったかな、初めて啼いてるスズメを見たのは……」

「ぼつぼつ常住する人が増えて、餌が豊富になったせいかしら」

「まさか、そんなこともないだろうが、スズメという奴は一番人との接触が多いくせに、一番人を怖れる。その点シジュウカラは人なつっこい。こちらが動かないでいると、頭や肩に乗り移ったりしかねない。一日中見ても見飽きないよ、あの動きは。見飽きないと言えば、コゲラやアオゲラもそうだ。いったったか俺が独りでいた時、朝早くものすご

い勢いでノックしている音で目が覚めた。玄関のドアを開けても誰もいない。第一そんな時間に訪ねて来る人なんかいるわけがない。

念のために裏口へ廻ってみても人影なんかありやしない。その時、またノックするような音がした。音を辿って行くと、お向いの家の戸袋をアオゲラが叩いているんだ。別に餌を採ってるわけじゃなく、縄張りの宣言らしく、学術的にはドラミングというらしい。普通は枯木を叩くらしいけど、この辺には枯木らしい枯木がないから、手近な戸袋で代用したんだ。叩いてはその辺をちょっと見廻し、仔細に次に叩くところを点検して、おもむろに……」

「まるで漫画映画のウッド・ベッカーじゃないの、あなたの好きな……」

「あの漫画よく出来てるよ」

「ワイン、そろそろおやめになったら」

女房は障子を閉めて、電灯をつけた。言葉遣いが改って来ると警戒警報であるが、ここ

は一気に乗り切らねばならない。

「サンコウチョウウって知らないだろう。俺は二度見たよ。たった二回」

「月日星ホイホイウって啼くから三光鳥。

何かで読んだことがありますよ」

「あの鳥、実に優雅に舞うんだ。輪を描きながら殆ど失速しそうなスピードで、長い尾をひらひらさせて、実に優雅に舞うんだ。極楽に住むという迦陵頻伽かりうびんがという想像上の鳥はこれだ、と思ったね。迦陵頻伽の雄おと云って、顔は男、体は鳥、そして聞けど飽きることなき妙なる啼声——」

ここまで喋ったところで、私は臉の奥の迦陵頻伽の面影の中に、東京で仕事をしている娘の顔を見た。そして、現実的な声が返って来た。

「もうお休みなさい、お父うちやま。飲み過ぎですよ、きょうは……」

(了)

寄稿

念仏の発展と称名する心

上野 浩
うえの ひろし

南無阿弥陀仏、南無観世音菩薩、南無遍照金剛、私共が寺院を参拝するとき、観音霊場を訪れるとき、八十八カ所をめぐるとき、いやいづこに行っても必ずこれら敬虔な念仏の声をきく。そして私はいま、念仏の声のよって来る所以をたずね、それを称名する心をさぐっていつてみようとする。

紀元前六〇〇年ころ、ヒマラヤ南麓ネパールの一王国に誕生した釈尊は、人間の生存苦を凝視するに忍びず、

遂に出家して、六年間の苦行の結果、成道して仏陀（如来）となった。そしてその体得した真理をもととして、多くの人々が担っている人生の苦しみを解き放そうとしたのである。この釈尊の教えを仏教と呼ぶ。

釈尊は主として印度北部を中心として人々に仏教を説いたが、その教え方は釈尊を慕って集まってくる、あらゆる人々をすべて平等に扱い、そしてその人々の知慧能力に応じてあるいはむずかしく、あるいはやさしく教え

を説くといういわゆる対機説法をとったのであった。しかし、この当時の教えは、釈尊が自ら「衆生と同じ人間であり、教えの主体はただ法（真理）のみである」としていたので、衆生は釈尊をうやまつてこそいたが、釈尊の高い力それ自体にすがって、人生の苦を解き放そうとする、いわゆる他力的色彩は殆んどなく、自力的な色合いが強かったのである。

釈尊の入滅後、その弟子達は仏教の根本の法をまもりながらも、仏教そのものをして、一切の人々を救済するのを理想とする大乘仏教へと発展せしめていった。したがって、仏教の世界は次第に広大になり、教義も複雑になり、そして人々を救済する力をもった多くの仏達、それは如来や菩薩達が、經典の言葉をかりると、恒河の沙の数ほど多く出現してきたのである。如来や菩薩の力にたよって人々が救われるという他力中心の教えがおり、ひいては念仏行による方法までに発展をしてきた。

この念仏行は、起源は勿論印度にあるが、しかし特に中国とわが国において大いに発展を遂げ、これに身命を打込んだ仏教者も数多く輩出した。なかでも中国の慧遠、曇鸞、道綽、わが国の空也、源信、良忍、法然、親鸞、

そして一遍などは、念仏に対する考え方に、それぞれやや異った点があるとはするものの、何れも念仏の中心的人物とすることができるよう思う。

ところで、念仏をする心とは一体いかなる意味をもつものであろうか。それは人々が仏の力を信じ、仏を頼り、仏を念じ、その力によってこの世の人生苦からの解放をはかり、そして永劫に滅びることのない人間の死後の生活において、安楽の世界に生まれさせてもらおうと願う心である。そのような意味から念仏とは、「南無阿彌陀仏」、「南無阿彌陀仏」とひたすらに仏を心に浮べ、またその名号を称えることをいうのであるが、わが国においては特に阿彌陀仏のみ名を称える「南無阿彌陀仏」の称名は巷にみちあふれるほど広く行なわれている。そしてさらに、「南無阿彌陀仏」はまた、帰命無量光仏あるいは帰命無量寿仏と称名しても同様であって、何れも阿彌陀仏に帰投信願し、無限の光明と無限の生命が得られることを意味する。

さて、私共が「南無阿彌陀仏」と六字の名号を称えることには、どういう意味があるのであろうか。いま浄土經典の一経、観無量寿經をひもといてみると、私共が極

樂世界に往生するにはいろいろな方法があげられているが、中でも散心の凡夫が往生できる九つの方法が説かれている。それは人々の宗教能力を上品、中品、下品、さらにそれぞれを上生、中生、下生に分けて九つの品としている。このうち最も能力の低い下品下生の人々に対して「至心に声をして絶えざらしめ、十念を具足して南無阿弥陀仏と称えよ」と、「南無阿弥陀仏」の称名をはっきりと教えている。なお、私はこの経の重点は下品下生の人々の救済を対象としたものがその中心になっているように考えられる。というのは、この人生社会には、愚鈍で、罪深い散心の凡夫、下品下生の輩が極めて多くを占めているからである。

また、阿弥陀仏の名号を称するとき、何故に極樂世界に往生しうるのであろうか。これについて善導大師は「仏陀に向って南無というのは発願廻向の意味で、阿弥陀仏にこの言葉を発するのは、仏を頼んだ行者の一種の修行であって、必ず往生するものである」と説明している。さらに、大無量寿経によると、かつて世自在王如来の世に、一国王があつたが、人々の苦を救うために国王の地位を捨て、法蔵と呼ぶ一修行僧となり、人々の往生

を願って四十八の願をかけ、ながい間の修業を経て阿弥陀仏となり、西方十万億土に極樂国土を建設したという。人々の救済のためにかけたこれら四十八願は、何れも念仏往生のための願と解することができるのであるが、特に、第十八願の「たとえ、われ仏となるをえんとき、十方の衆生、至心に信樂して、わが国に生れんと欲して乃至十念せん、もし、生れずんば正覺を取らじ」の一願は、その中心ともなるべき最も重要な願であるといわれている。

ところで、私共が往生を願望する極樂国土とはいかるところであらうか。阿弥陀経によれば、この国土は、例えば七重の垣根があり、七重のタラ樹の並木があつて、七重の鈴をつけた網で飾られ、金、銀、青玉、水晶の四種の寶石をあまねくめぐらした燦然とした国土であつて、また、それぞれ青色、黄色、赤色、白色の蓮華の大輪などが咲きそろう美しい国土であるとしている。そしてこの経もまた、善男子、善女人が一心不乱に阿弥陀仏の名号をとなえれば、この極樂国土に往生すると教えている。

釈尊にはじまった仏教は、壮大な大乘仏教へと發展

し、しかも凡夫にもたやすく救いに到達できる念仏往生の教えが出現したが、私は大乘仏教に革新的な結末を与え、その最高の極致を具現せしめたのが実に法然上人であると信じている。

法然上人は、十五歳のとき叡山に登って僧となった。

修業、勉学、一切経を読破すること五辺にわたったといわれる。しかし、天台の学問にあきたらず、黒谷に走り、凡夫衆生の往生と念仏の真髓を求めて二十余年の求道の末、善導大師の観經疏の中の一節に遭遇し、遂に悟りに達し、「専修念仏」の一大発覚に到達されたのである。法然上人四十三歳であった。

法然上人の専修念仏とは、「口にただ南無阿彌陀仏と称えるだけで、人間は阿彌陀仏の力によって必ず極楽に往生を遂げることができる」という他力、易行の教えである。これは、「南無阿彌陀仏」と称える称名念仏が往生の業の根本中心であり、余行を往生の本願とせずという徹底したものである。

ところで、人間がある願いを抱き、例えば、極楽世界に往生することを願って、阿彌陀仏の本願をかたく信じ、これに向って南無と称える場合、その人の心という

ものは果してどうなのであるうか。いやしくもその心には汚れ、偽り、曇りなどがあるであろうか。私はその心こそ、清水のように澄んだ、清らかなものであって、何物をも信じ込もうとする心以外の何ものでもないと思う。考えているのである。

思うに、この世において自ら修業し、遂に自ら解脱しうるものは極めて少ないと私は思う。それを知りつつ人々よ、何故に悟りの極めて困難な難業道に向って、歩いて行こうとするのか。愚かでかつ罪深い私共は悟り困難な難行道をはなれて、一心に「南無阿彌陀仏」の世界に入り、称名念仏の生活を通じてこそ、最も容易に極楽世界に到達し、往生するのであって、それでこそ私共は永劫に安楽の世界に生きることができるのではなからうかと思う。

私はこのような念仏の心を胸の奥底に思い浮かべながら、今朝も私の家の小さな仏壇の中におられる阿彌陀仏に向って合掌し、「南無阿彌陀仏」をくり返し称えながら一日の行動を起そうとしている。

△世相評談▽

「緑」へのめざめ

○「松枯れ列島」の現状

風薫る初夏が来た。五月一日のメーデーを初めとして、さすがにこの月は、新緑の戸外



たから
宝田まさみち
正道

に出てさわやかな大気を呼吸する機会が多い。五日の子どもの日、十三日の母の日はもとより、十日から始まる愛鳥週間にしても、家の中で過ごすよりも、つれ立って街に郊外に出歩くほうが楽しいにちがいない。息苦し

いように騒がしく濁った都会のジャングルや、うるおいを失ったコンクリート砂漠から、たとえひとときでも脱け出して、緑に囲まれた自由の天地に、思いきり心や身体をのばしたい、と思うのが、多くの都会人の偽らぬ、ささやかな願いであるからである。

ところが、実際はそう簡単に都会の人々の願望を満たしてくれる緑の世界は見つからない。今や都会の周辺には、そういう桃源境もオアシスもほとんど姿を消してしまった、といったほうがいいかもしれない。

第一、土がない。道も広場もすっかりアスファルトやコンクリートで固められた。いきおい、家を建てるにも、生け垣はつくれず、ここでもコンクリートや大谷石の冷たい塀が幅をきかす。公園の立木も街路の並木も、吹きまくる排気ガスなどにやられて、ともすれば本来の緑色から茶褐色の枯木まがいの萎びた姿と化して元気がない。それでも道路や石だたみの割れ目からは、生きよう延びようと

する意欲を示さんばかりに、名も知れぬ雑草の緑が芽をふいている。ただ、これとて所詮は、踏まれたり抜かれたりで、一向に育たず、せつかくの緑の「いのち」も中絶のあわれさを感じさせるだけにすぎない。

今年の勅題は「緑」という御題であったが、皇居前から大内山にかけての「松の緑」も、近頃はすっかり色褪せて、瑞々しさが失われたのに気がつく。さすがの常緑樹も、虫喰いは防げて公害には抗しきれず、日々衰えて枯渴の末路をまっばかりかもしれない。

そういえば皇居ばかりではない。今や日本列島は全般的に「緑」から見放されて、ここ数年来、「松枯れ列島」と渾名されるほどのひどい凋落ぶりである。白砂青松で名高かった日本三景の松島も天の橋立も、日本美を誇る主役の松が立ち枯れてはどうしようもない。

寒さに強く長寿を誇る常緑の松でさえ、この調子であるから、他の樹木はおして知るべ

く、二十一世紀には、日本は緑なき禿^はげ山と化するのではあるまいか。

○緑を守るキャンペーン

昨年五月、政府自民党本部の前を通りかかった時、目にしたのは、白い建物の上部に大きな横断幕をはり、それに

花の輪人の輪緑の輪

自民党

と書かれてあったことを想い出す。

なかなかいい文句である。このような立派なスローガンを掲げて、文字どおり「花と緑」を守る人の輪づくりを実践してくれば、まことに自民党も遅まきながら見上げたものであると思う。しかし、はたして具体的には、どこまでこのスローガンが徹底して実施されているか、疑問の点も少くない。長い目で見守るしかないであろう。

何しろ、今や一分間に十六ヘクタールという広大な森林が、地球上から消えつつあると

いう現状である。木材の濫伐、土地の造成その他によるらしいが、なんとその木材資源の大部分を輸入しているのがわが日本であると聞いて驚いた。同時にその国民の一人としてまことに自責と慙愧^{ざんき}の念を禁じ得なかったことも事実である。

政府の関心はともかく、民間でも今年は、緑を守る運動や緑化キャンペーンの声がよく高く高まり、緑化宝くじが売り出されたり、緑の国勢調査が企画されたりして、環境汚染を防ごうという国民意識の高揚に一段と工夫がこらされているのはうれしいことである。

○使い捨て文化

しかしながら、一方において、高度成長期の豊かな物資にめぐまれた日本人の贅^{ぜい}沢さは容易に縮減できず、日常生活は衣食住すべてにわたってむだ使いが多すぎる。物を大切に
する觀念がなく、万事使い捨て文化の只中に

平然と暮している日本人に、餓えて戦災難民や開発途上国の人々から、怨嗟えんさの声があがるのも無理からぬことであろう。

例えば、結婚披露宴などで見かける豪華な料理の食べ残しといい、細かいことでは、日用品、紙、割箸、妻楊子などの使い方にしても、まことに勿体ない限りといわざるを得ない。中でも、建築用材や紙工業品などとして加工の上使われる輸入木材の消費量は莫大である。換言すれば、われわれは、せっかく生い茂った「緑」の元木を、地球が丸坊主になるまで、日夜食い荒して飽きない「白アリ」同然の存在といわれても仕方ないのである。

一方で「緑」を守る運動を推進しながら、他方では「白アリ」となって「緑」の原木を食いつぶすのでは、差引プラスマイナスゼロである。いつまで経っても、地上に緑の甦る日は来ない、と言わねばなるまい。

仏教文化で育てられた、われわれ日本人

は、すべての物に命があり、それをありがたく使わせてもらう勿体なさを教わって年久しい。一膳の割箸も一本の妻楊子も、思えば大自然のいのちをいただく、つつましい心がけに裏づけられているはずである。だから、積極的に緑化キャンペーンに参加するはもとより、消極的ながら、物を節約して大切に使う心を養い実践することも、やがては緑を守る大きな自然愛の精神につながることを知らねばならないと思う。

○緑の効用

ところで、人はなぜ、緑を愛し緑を守ろうとするのだろうか。緑のどこに魅力や効用があるのだろうか。

科学者の研究によれば、新緑の木々からはフィトンチッドという殺菌性のある微細物質が発散されるという。五月の空気は特にさわやかでうまいとか、風薫るとか、言われるの

も、その作用によるもので、端午の節句の粽が長持ちするのも、それを包んでいるササの葉からフイトンチッドが出ているためとか。

また、心理学者の説によると、緑という色は、多分に人の心を落ち着かせる効用があるらしい。道理で、緑の草木で覆われた森林を歩く「森林浴」は、さわやかですが、しごく心身のリフレッシュ、健康にいい、とされるのであろう。まさに、緑は大自然のいのちを育み包む衣として、生物すべての生きる根元をなすもの、ということが出来る。宗教的に言い換えれば、大自然の恵みは、そのまま、み仏の大慈悲の顯現であり、万物はそれによって生かされているのである。

それにもかかわらず、愚かな人間どもは、この緑の偉大な効用を忘れて、欲望の戦火で地球を傷つけ、核兵器を創って科学の勝利を謳歌している。いわば自らの手で大自然を破壊し、神仏を冒瀆して自業自得、生の根源を断ち切って人類滅亡の危機を迎えんとしつつ

ある、と言えよう。ばかげた話である。

われわれが、声を大にして緑の失地回復を叫び、緑を守り緑化に努めようとするのも、自らの首を自らの手で締める愚を防ごう、と呼びかけるだけのことにすぎないのである。

○「おかげ」の木の子

野原で俄か雨にあった場合、近くの木のかげに駆けよって、雨のあがるまでその木の下で雨宿りした経験のある人なら、傘代りになつてこの身をずぶぬれから救ってくれたその木にお礼を言つて立ち去らずにはおれないだろう。密集してびっしりと身を寄せあい重なりあつて、雨を防いでくれた一枚一枚の緑の葉のありがたさ。彼らは自ら雨に濡れながら、お互いにかばい合い助け合つて、緑もゆかりもない旅人を濡れネズミから救ってくれたのである。

同様に、夏の暑い太陽が照りつける街頭で

濃い木かげをつくり、人を炎熱からかばい、涼風を呼んでいこいの場を提供してくれるのも、一団となって犠牲となる緑の木の葉があつてこそである。いわば、いずれの場合も、緑の木の葉たちが自らの身を雨や太陽にさらして犠牲に甘んじつつ、われわれを献身的に擁護してくれている結果ではないか。

このように考えると、常に孤独な旅人にすぎない人間の社会においても、いつでも、どこでも、必ず他人の提供してくれる善意の木の葉に助けられ守られなければ、一步も進むことはできない。名も知れぬ緑の木の葉の無償の行為こそ、何物にも代えがたい天の恵みである、と思えば、自ら合掌して緑に感謝する心もわいてくるだろう。息苦しいばかりの都会のジャングルで、緑を失いつつ生を求め現代人は、まずおかげを大切にす謙虚な宗教心にめざめることが、先決条件ではなからうか。

長田芳一画 五雨みなこ文

絵本 ほうねんさま

B 6変型判／定価三〇〇円

右近れい子画 福嶋智誉編

絵本 おじぞうさま

B 6判／七二頁／定価四〇〇円

仏教まんが・教育図書

◎子供たちのやさしく、すこやかな成長を願つて、大人たちからのすばらしいプレゼントにご利用下さい。

大 道 社

〒102 東京都千代田区飯田橋一―一―一六

電話(〇三)二六二―五九四四 振替(東京)一―八三四七

浄土句集

一田牛畝選

東京 末常てる子
春浅き夫逝き十とせ東の間に

山口 上野 明達
白雲のヒマラヤに映ゆ御来迎

福岡 荒牧 還愚
梅林の香につつまれて句碑生る

福岡 服部 光代
出産の予定書きそえ賀状来し

福岡 上滝津弥音
合掌の蕾の如く悴みて

熊本 山崎 石庭
西方に生まると信じ春の旅

東京 岩沢 正義
七種粥妻亡き味をすすりけり

山梨 青山富貴江
二、二六忘れられな人も居て

東京 野本 知子
雛の灯のうるみて忌日一つ殖ゆ

評 『玉藻』主宰の星野立子先生が、三月

三日八十歳にて御逝去せられた。俳界にとつてはまことに淋しいことであつた。丁度雛の日で、其の灯もうるんでいるように、俳句を愛する私共に悲しい日がまた一つ殖えた。

東京 真野 龍
べそかきの踊る児もいて雛祭

評 雛祭で賑っている児の中に、べそをかきつつ踊る子供がいる。何か気に入らぬことでもあったらしい。これも子供にはよくあることだ。

福島 秋葉 淳
みちのくの枯野新幹線走る

評 みちくにも新幹線が走り出した。これから東北地方も発展して、枯野も新緑に包まれて繁栄することが楽しみだ。

東京 吉田ゆきゑ
加護ありて庫裡上棟や涅槃西風

評 浄財も集つた。庫裡上棟式も涅槃西風のお天気に恵まれ、職人の法被姿、木遣りの声、檀信徒のよろこび如何ばかり。

福岡 原 敬二郎
城壁に残る銃弾枯蓮

千葉 須田 牧草

かたくなな背が爪をきる日向ぼこ

雨だれの音に伝わる春きこゆ

障害の児も末席に法然忌

大分 丹羽 難中

熊本 山崎 松子

春浅き月に祈るや旅の無事

運ぶ歩もゆるやかにして春の昼

残雪のまだらまだらや奥耳納

福岡 行正 一如子

東京 細田 初枝

法灯の点りて暗く雪明り

白梅を少し汚して夜の雨

声裏と御忌の導師の老住持

福岡 権藤みきを

三重 山田 歌甫

遠峯雲照りつかげいつ冬夕焼

弥陀仏の慈悲に縋りて春灯

声頼る僧なれば風邪治さねば

福岡 行正 明弘

福岡 荒牧 亀齡

裏木戸に人来る気配庭の雪

雪残る大本山の屋根の反り

菜の花の黄のやわからかに散りそめし

福岡 釈河野ねはん

東京 小笠原香祥

しゅんしゅんと湯のたぎりおり春雲

願いごとなき幸や初詣

姑白寿二歳の孫と雛かざる

福岡 田代 葦女

東京 栗原やえ子

カラフルのポート片寄せ春を待つ

春を待つ煎じ薬の苦みよく

白菊に埋れ焼かるる棺の母

福岡 橋爪 弘子

東京 満尾衣有子

母忌日路臺こそまたれけり

十人の孫の揃ひしお年玉

枝に杖して本山の樟若葉

一田 牛畝

福岡 前田 秀峰

福岡 安藤平次郎

◇◇◇“浄土句集”欄への投句のお願い

—及び俳文等の寄稿のお願い◇◇◇

『浄土』誌本文中のオアシスともいうべき、“浄土句集”欄は、選者であるホトトギス同人一田牛畝先生の献身的なご尽力と、あわせて熱心な俳句を愛する会員諸兄に守られて、二ページながら情味と、季節味に富んだ味わい深い俳壇を作っています。心をこめて作句され、熱心にご投句される皆様方へ心から感謝させていただきます。

さて、この“浄土句集”欄へ、どうぞほかの同心の方々もできるだけ多くご投句していただくことをお願いし、また重ねて俳文や句会便り、あるいは俳句にまつわる折々の随想等をご投稿いただくことを、ここに衷心よりお願い申し上げます。

左記要領で、くれぐれも宜しくお願いします。

一、内 容 俳文、句会便り等の随想

一、枚 数 四百字詰用紙八枚半程度

一、締 切 毎月五日

法 然 上 人 鑽 仰 会

論語「仁」論（下）

—「仁」は共同社会の理念—

河野喜雄こうの よしお

（文芸評論家）

三 詩・礼・楽

「泰伯第八・八」に、有名な左の礼語が存する。

興リニ於詩ニ、立チニ於礼ニ、成ルニ於楽ニ。

本孔語は、白川静博士の言われているように、中国語独特（日本語もそうであるが）の、「主語省略」の立言であることは疑いない。

ところが、諸書殆んどすべて、その「省略主語」について触れて居らず、例えば吉川氏は、

この集は、人間の教養の順序をいう。道徳的興奮の出発点となるのは、詩経である。

〔論語〕上・P二四六

と解されて居り、貝塚氏は、

詩を読むことによって、人はまず興奮をおぼえ、下略。

と解されて居るのであるが、その「省略主語」に触れずして、「人間の教養の順序」などというのも可笑しいし、「省略主語」には全然無関心で、イキナリ「興於詩」のみを解して居られるのも、孔語解としては、到底、納得出来ない。

私はハッキリと言うが、本孔語の「省略主語」は、疑いもなく、彼の哲学のメインテーマであるところの「仁」なのであって、それには、「論語」中に、ハッキリと、左の様な傍証が存するのである。

人而不^レ仁^ニ、如^レ礼^ヲ何^ニ。人而不^レ仁^ニ、如^レ樂^ヲ何^ニ。

(人伯第三・三)

本孔語における「省略主語」が「仁」であることは、

万・疑いなく、孔子は、そのメインテーマであるところの「仁」を始終・弟子たちに説いていたので、弟子たちは、その主語たる「仁」が省略せられても、それが「仁」であることを、即座に納得したのである。

では、本孔語の解は如何。

上記のように、両先生とも、その初語「興於詩」を解して、その「詩」は「詩経」であり、その「興」とは「興奮」であるとせられているのであるが、この解は、全くいただけない。

「康熙字典」に依ると、「興・起也」とあって、「興」とは初発。スタートの意であるとともに、その「詩」も「詩経」自体ではなくって、

詩三百、一言以蔽^フ之。曰、思無邪。

(為政第二・二)

と孔子が言っているように、その詩経を生成したとこ

ろの、紀元前十三・二一八・七世紀当代の、上代古人の、原始素朴・初心思無邪なところの、「詩」心を言うのであって、「仁」は、その「詩」心に初発・スタートする、というのが、この頭句の真意なのであり、本句はハッキリと、上掲孔語の、

為_レ仁由_レ己而、由_レ人乎哉。

と相応しているのである。

そして、「由_レ己」のであり、「興於詩」なのであるから、その「詩」心が、「仁」を形成するところの「実質」であり、「内容」であることは疑いなく、故にそれは孔子によって、

剛毅木訥、近_レ仁。

(子路第三・二七)

と言われているのであり、その「剛毅木訥」とは、言うまでもなく、原始素朴・初心思無邪なところの「詩」心のシノニムなのである。

「仁」は、その「詩」心に初発はする。

しかしながら、その「仁」は、「二人」社会の理念なのであるから、その「二人」の相手方との、「相互調和」が必要不可欠なのであって、その二人の「相互調和」の形式こそ、他ならぬ「礼」なのであり、その「礼」的形式に依って、「仁」は始めて社会的に成立する——というのが、「立於礼」の句意なのである。

「詩」心に初発するところの「仁」は、「礼」的形式に依って、一応・社会的に成立をするのではあるが、既にして其処には、その成立の瞬間以降、最少限度に、その「詩」心的内容・実質と、「礼」的形式・手段との対立・二律背反を発生する。

そしてその対立・背反を弁証法的に止揚・統一して、「仁」を社会的に完成させるものこそ、「楽」即音楽である——というのが、終句「成於楽」の一語なのである。

周知のように、音楽というものは、私たち人間の内情を直叙し得る特性を有するとともに、「礼」が、「礼儀」と言われているように、その「礼」の儀礼的・儀式的進行に能くマッチし得るところの、タイム・リズム・テンポを具有しているので、「詩」心と、「礼」形

式との対立・背反を、謂わば弁証法的に止揚・統一して、「仁」を完成し得るのである。

孔子が、その音楽を熟知し、古詩三千余篇を撰んで三百五篇の「詩経」とし、尽く賦曲したと伝えられているほどの、言わば専門家級であったのであり（一説に依ると、孔子は、楽家の出とせられる）、その「楽」に対する孔語およびその態度は、「論語」中に少なからず存するのであるが、茲に及ばない。

そして、本稿において、その「礼」の仔細にも触れないのであるが、上述「信」と同じく、これは別述する外ないので、細説は罷めるが、ただ一つだけ、是非、取り上げておかなければならないことがある。

他ではない、それはその「礼」形式の、形式・形骸化——という一事である。

「形式」というものは、事物の内部的実質・内容を、対他的に「表現」するところの「手段」なのであるが、その「形式」「手段」が歴史的にある程度固定化すると、漸次、その「形式」「手段」のみに終始して、その実質・内容を喪失してしまうようになって来る。「礼」形式に就ても、それは決して例外ではなく、

それは左の両孔語に、ハッキリと断ぜられているのである。

巧言令色、鮮矣仁。

〔学而第一・三
陽貨第一・二七〕

巧言令色足恭、左丘明恥之。丘亦恥之。

（公治長第五・二五）

「礼」的形式においては、その言語・態度・動作が可及的慎重・厳正でなければならないことは、勿論であるが、それが、その実質・内容を略々喪失して、形骸化して了ったケースが、「巧言・令色・足恭」なのであり、孔子はそれをハッキリと、「鮮矣仁」と断じているのである。

上述、「剛毅木訥、近仁」の孔語と、まさに正反・対比すべき一語ではなからうか。

そして、この正反・対比的両語を前提とするところの、もう一つ大事な孔語が存する。

章を代えよう。

四 野人の礼楽と君子の礼楽

「先進第一・一」に、有名な左の孔語を存する。

先進^シ於^ニ礼楽^ニ、野人也。後進^シ於^ニ礼楽^ニ、君子也。
如用^セ之^ヲ、則吾徒^ニ先進^ニ。

本語における先進・後進を解して、孔門における弟子たちの先進・後進などを説く説も存するが、諸説概ね、単なる先輩・後輩の意に解して居り、私はハッキリとこの通説には反対である。

そして、その「先進」とは、「仁」の初動の実質・内容である、上述「詩」心を、豊富に内蔵するところの、上代古人の謂いであり、その「後進」とは、孔子当代における所謂「君子」級を謂うもの——と私は解する。

では孔子は、何故・「君子の礼楽」を擁して、「野人の礼楽」などを撰んだのであろうか。

諸説・殆んどそれに触れて居らぬのであるが、本孔

語は、疑いもなく、上掲

剛毅木訥、近仁。

巧言令色、鮮矣仁。

の両孔語を前提としての立言であって、その「礼」的形式においては未熟ながらも、「詩」心的実質豊富であるところの先進野人の方が、「礼」的形式には完熟しながら、既にしてその「詩」心的実質を略々喪失・形骸化して了った当代君子よりも「近仁」なので、孔子はハッキリと、その「野人の礼楽」の方を選んだのである。

すなわち、「君子の礼楽」は、孔子に依ってハッキリと否定せられたのであるが、それではその「君子」は、疑いもなく、真の「君子」ではなくって、「似而非君子」だということになる。

では、その「君子」とは、一体どのような人物であったのであろうか。

左の孔語が存する。

質・勝^レ文則野、文・勝^レ質則史。文質彬彬^{トシツ}、然後君子。
(雍也第六・一八)

その「質」とは、人間生来の本質・性格と解して、多く誤まるまい。そして「文」とは、礼・学・射・御・書・数などの文化的教養を意味するであらう。

その「質」の方が「文」より強いものが「野」であることは疑いないが、その「文」が「質」より勝っているのが、謂わば下級官吏を意味するところの「史」である、というのは、果して如何なる意なのであらうか。

私はそれを上述の「巧言令色」と同じく、文化的教養のみに終始して、人間本来の剛毅木訥・初心思無邪の「詩」心を略々喪失してしまったところの「似而非君子」級人物と解する。

その「野」の方が、「近仁」ではあるにもせよ、未だ「仁」を完成してはいず、その「文」の方は「鮮矣仁」であるから「不仁」であることは、言うまでもない。

その「質」と「文」、その「詩」心と、「礼楽」的式

が両々完備・統一せられてこそ、始めて、「仁」が完成せられるとともに、その「仁」を個人的に完成した人物こそ、真の「君子」である、というのが、本語の主旨であらう。

故に「君子」とは、「仁」の「個人的完成者」を言うのであって、上掲「後進君子」や、本語の「史」が、真の「君子」ではなく、「似而非君子」であることは、万、疑いない。

そして、そうだとすると、上掲孔語における「後進君子」の「君子」の語は、明らかにパラドキシカルに使用されていることになる。他でもない、「似而非君子」の意なのだ。

そして、これは孔語ではない——というのが学界の定説なのだそうであるが、「中庸」にも同様のパラドキシカルに使用せられたところの、左の孔語が存する。

君子、遵^ツ道而行^キ、半塗^ニ而^テ處^ス。吾弗^ハ能^ハ已^ハ矣。
(第二章)

当代「君子」と呼ばれた階級の人物であらうが、一

応はその共同社会におけるところの「人たるの道」に従って行きながらも、皆尽く、途中でそれを止めて了う。自分は、勿論、止めることなどは出来ない。何故なら、それは人たるの道なのであるからである——というのが、孔語の主旨であらう。

その「半塗廢止」の「君子」を下瞰しつつ、毅然として、「吾弗^レ能^レ已」と言い切っているような人物が、当代において、孔子級以外の如何なる人物にも省り得よう筈がない。

本語が孔語であることは疑いなく、むしろ孔子に依つてのみ断ぜられた立言なのであって、その「君子」の語が、上掲語同様、パラドキシカルに使用せられたものであることは、万、疑いないであらう。

以上、「仁」に就ての概説を終える。

その細説、ことに「信」「礼」「楽」については、別述の外はあるまい。

(了)

村瀬 秀雄 著

『和訳浄土三部経』

B 6 判 四七四頁 価二五〇〇円

『和訳上人選択集』

B 6 判 三八七頁 価二五〇〇円

『全訳上人勅修御伝』

B 6 判 八四七頁 価六八〇〇円

『和訳観經四帖疏』

B 6 判 五八四頁 価三五〇〇円

『和訳六時礼讃』

B 6 判 二六五頁 価二四〇〇円

取扱い 法然上人鑽仰会

◎『浄土』表紙版画絵販売についての案内

『浄土』五月号をここにお届けいたします。

どうか、『浄土』誌の充実のために、会員諸兄の皆さまの暖かいご支援とご高配を心よりお願い申し上げます。

好評の『浄土』誌表紙版画絵は、小林治郎先生のご好意を得て、豪華額縁に装丁して販売させていただいております。額縁代も含めて、金二五〇〇〇円というお求めやすいお値段で、季節観に溢れた芸術味豊かな版画掛物が購入できるわけです。どうぞ振替にてご注文願えれば幸いです。

また、大きさの方は、『浄土』表紙絵よりはずっと大きく、約20cm×30cm位の大きさですが、額縁の大きさでいえば30cm×50cm程の大変豪華な一幅となります。

なお限定販売のため、予定数に達しましたら、申し訳ありませんが、おことわりさせていただきます。しかし現在のところ、昨年度の大西耕三先生の雅趣に富んだ版画絵が、正月号から十二月号までの在庫も充分にありますので、ふるってご注文願えれば幸いです。

(申し込み先) 〒102 東京都千代田区飯田橋一―一六

法 然 上 人 鑽 仰 会 振 替 (東 京) 八 一 八 二 一 八 七

木彫像・欄間・一品作



千手観音像

天地八尺

桧材

24K仕上げ

真心値

山形渡し ￥270万

有限会社 原 田

▶ ご一報下さればご相談に応じます。

〒990 山形市相生町 TEL.(0236)22-2364

「浄土」購読規定

会費一カ年 金三、〇〇〇円

(送料不要)

浄土 五十巻 五月号

昭和十年五月二十日
第三種郵便物認可

昭和五十九年四月二十五日 印刷
昭和五十九年五月一日 発行

編集人 宮林 昭彦
発行人 佐藤 密雄
印刷所 長谷川印刷(株)

東京都千代田区飯田橋一十一一六
発行所 法然上人鑽仰会

〒三三 振替東京二六二局五九四四番
電話東京二六二局五九四四番

(新)

(刊)

『生活の倫理』

著者 大正大学教授
宮林 昭彦

B 6 判 一九四頁 定価二二〇〇円 (〒二五〇円)

◎春の章・夏の章・秋の章・冬の章・法の章——五章よりなる宗教的エッセイ。季節感に富んだやさしい滋味深い文章が印象的かつ感動的!!

◎『浄土』誌の愛読者諸兄にも必ずや感銘をもって、読後の穏やかな人生観照となることであらう。広くおすすめしたい。

(発売) 〒102 東京都千代田区飯田橋一―一―六

大 道 社

電話 (〇三) 二六二―五九四四

振替 (東京) 一―八二四七

第五十巻

五月号

昭和十年五月二十日 (第三種郵便物認可) 毎月一回一日発行
昭和五十九年四月二十五日印刷 昭和五十九年五月一日発行